
4つの天

福寺なつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

4つの天

【Nコード】

N9284F

【作者名】

福寺なつ

【あらすじ】

「忍岳と鳳穴、花火大会」ギャグです。

(前書き)

これはサイト「Banca」に載せたものです。

「忍岳と鳳穴、花火大会」

+++4つの天+++

色とりどりの生地が、電車の中で揺れる。

「今日は楽しい花火大会」

今日は楽しい雛祭り、のメロディにのせて岳人は、プラットフォームに降り立った。

岳人は、だいたい色に染まった空を満足げに見上げた。
夕暮れは快晴の名残をとどめ、今日の花火大会成功を予感させる。

水の中を赤い、黒い、オレンジの金魚が泳いでいく。

そよぐ水面を見ながら、穴戸は金魚をすくった。

「あ」

白い紙は破け、金魚が音を立てて落ちた。

穴戸は、すくいあげた4匹の金魚を手にならげた。

（レギュラー部員全員の分を、すくうつもりだったのにな）

白い綿アメを横目で見ながら、忍足は、たこ焼きを買っていた。

（かつおぶし、ケチってんなー）

と己こそケチなチェックを入れながら、彼は岳人のもとへ歩いて行った。

岳人が白い綿アメと赤いりんご飴のどちらに興味を示すのだろうと思いつきながら。

「赤い花火ですねー、穴戸さん」

鳳は、とてものかな声をあげながら花火を見上げた。

ヒュウウウウー、と消え入るような音がした。
一瞬の静寂。

ドオオンと花が暗闇に咲く。
ワアアアという歓声のあと、パラパラと音がする。
灰が落ちてくる音。

花が空に咲いた証だ。

穴戸が持つビニールのなかで、金魚がそそよと泳ぎまわっていた。
「なんで」

穴戸は硬い声で問いかけた。

鳳は視線を花火から隣の先輩に向けた。

穴戸は金魚を持ったまま、後輩を見上げた。

「なんで花火大会に、俺を誘ったんだ？」

また花火が空に打ち上げられた。

「食い意地張ってんなー」

「侑土こそ、たこやき！」

右手に、たこやきを持ちながら忍足は岳人をからかった。

当の岳人は忍足の予想通り、りんご飴を片手に笑っている。

「そんなん言うたかて。」

俺の顔見て、自分ら一言目には”たこやき” 二言目には”食い倒れ人形” 言うやん」

たこやきを持ったまま器用に肩をすくめてみせる忍足から、岳人はトレイのつまようじを取る。

慣れた手つきで、岳人はたこやきを口に頬ばるとモグモグと食べた。
「ひとくち」

と言って、忍足は岳人のりんご飴を、かじった。

ドオオオン、ドオオンと、まるで急ぐかのように花火が次々に打ち上げられる。

「誘っちゃいけなかったですか？」

いけなくはない、と宍戸は鳳に思った。

「宍戸さんは、断らないでしょう？」

そう呟く鳳の声が、宍戸の耳に届いた。

こんなにも、騒がしくたて続けに空に花が咲いているのに。

聞こえなかった振りを宍戸はしなかったし、鳳は微笑んでいた。

「今、口の中、熱い」

岳人は早口で囁いた。

「たこやき食べたからやる。」

俺は、今、口の中、甘いよ」

忍足は去年と同じ台詞だなと思いつながら言った。

「赤い、の間違いじゃねえの？」

「見てみる？」

「見せてみそ」

去年は、かき氷だった。

いちごとブルーハワイ。

ベロを見せたのは、どっちが先だったのか。

そのままキスをしたのは。

「あー、甘い……」

忍足は去年と同じ甘さを思い出した。

砂糖の味、舌の味。

岳人は下を向いて、

「侑士のはッ！タコの味だった！！」

と言ったので、忍足は思わず笑って、

「嘘やろ、チュウで蛸の味なんか分かるわけないやん」

と冷静に言い返した。

「侑士のタコ！」

「赤い舌して、よう言っわ、ほら」

忍足は上を指す。

「また赤の花火や」

穴戸は鳳に花火大会に誘われた時、断るつもりは全くなかった。

「お前、屋台冷やかしてねーのか」

赤い花火があがる。

団扇だけ持っている鳳に穴戸は何の気なしに聞いた。

「俺、屋台より穴戸さんを見ていたいんです」

次は黄色の花火。

「花火大会だろ」

鳳は花火を見上げていて、穴戸に花火に照らされた横顔を見せている。

屋台は見えてなくても花火は見てるじゃないですか

「花火なんて口実に決まってるじゃないですか」

花火を、うつとりと見上げながら鳳は、はっきりと告げた。

「穴戸さんは、どうして来たんです？花火、見るため？その、金魚をすくうため？」

次々と花火があがる。

「俺は…、楽しそうだから…」

花火があがる音の合間に、彼等は確認し合う。

「俺は穴戸さんとだから来たんですよ」

お互いの気持ちを。

「嫌いな奴とは、来ねーよ」

素直じゃないと花火がいつているような気がするのと穴戸は思った。幻聴だ、花火が喋れるわけがない。

すぐに自嘲するも、穴戸はふと思う。

パアアツと咲いて、すううつと消える花火にまぎれて、好きだと言ってみたくなるのだと。

そういうのでいいのならば、と穴戸は金魚の袋を握り締めながら思う。

だけど一度、言ってしまうえば、それは水に浸されて破れやすくなった金魚をすくう紙と同じなのではないかと穴戸は思うのだ。

破れてしまった紙で金魚はすくえないように、言ってしまうえばそれは敗れるに等しいのではないのかもしれないけれど。

なにかが破れてしまうような気がするのだ。

穴戸の気持ち、ふたりの関係が。

まるで花火が消えてしまうように鳳が消えるのは嫌だと穴戸は思った。

最後の花火があがった。

「穴戸さん、帰りましょうか」

「そうだな」

人の流れに沿って、ふたりは歩いていく。仲の良い先輩と後輩。

ダブルスを組んで、試合が終わって、学年が違って、花火大会には来て。

駅へ向かうには公園を突っ切るのが早い。

公園は街頭の周囲以外は暗くて、あ、と穴戸が思った時には暗がりだからまるで構わないとでもいうような口付けを受けていた。

鳳は自分の横を歩いていたはずなのに何が起こったのだろうか、いぶかしんでいたせいで、

「怒らないんですか？」

と聞かれた穴戸は、鳳が自分の前に立ち塞がっているのに、ようやく気づいた。

長身を見上げると彼の暗がりの中で光る目の後ろには、さっきまで花火が色とりどりに綺麗だったのに今は真っ暗で星だけがまばゆい光を放っていたのだった。

鳳は怒ったように、じっと穴戸を見つめている。

彼らの横を花火大会帰りの人々が通り過ぎていく。

穴戸は、すくったばかりの金魚がいったビニールを、ぎゅっと握り締めた。

それを見て、鳳は笑う。

穴戸を更に暗がり、公園の端のほうへ連れて行って抱きしめる。

「手が、ふさがってるから、ふりほけないでしょう」

と金魚をダシにして鳳は、穴戸の髪に鼻先をうずめる。

「金魚、はなします？」

鳳がそう言っても穴戸は黙って首を横に振る。

彼の体をふりほどかない。

花火大会を断らない。

それは、夏が終わっても花火が終わっても、きっと変わらない。

穴戸はそんな予感をまだ告げられずに居た。

終わり。

（後書き）

2006年07月18日 22:58:45に「鳳穴&忍岳それぞれの花火大会！」

というリクエストを頂きました。
有難う御座いました。

（あとがき）

これは20行くらい書いたところで、ちょうどパソコンが壊れました
思い出の話です。切ない。

なんとなくリクエスト内容的に、ワイワイガヤガヤしたのを書いた
らしいのかなと思ひまして、

3つ目のリクエストを散々ギャグで通したので今回は珍しく、しつ
とりと仕上げてみました。

でもあんまり書き込んでないですね。

描写が甘々です。

それ以上に、今回は終わり方が、ちょっとエゲつないというか、ス
ツキリしないのですが、

この話は穴戸が金魚入った袋を握り締めるところで終わりです。

3日くらいかけて続きを考えてみたんですが、どう考えてもこの先
は鳳が不埒な行為に及ぼうとして、

穴戸が金魚の入った袋を鳳にビシャアアとかける場面にしか繋が
らず、金魚が可哀相だわ、

花火と関係ないわ、というわけでこの話は穴戸が金魚入った袋を握
り締めるところで終わりです。

あ！何も金魚入りの水を鳳にかけなくても、穴戸が拳で反撃すれば
良かっただけなのかな。

……そんな花火大会でいいのか。

忍岳は、食い気で乗り切りました。

次のリクエスト小説は樺跡の夏休みです。次で5つ目。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9284f/>

4つの天

2010年10月10日20時25分発行